# 紙屋敦之氏の人と業績

深谷　克己

2017 年に定年退職した紙屋氏が、2019 年、退職後わずか 2 年で逝去した。紙屋氏と私の、大学院生時代の恩師北島正元先生は、1970 年代、70 才を過ぎて間もなく亡くなられたが、当時はそういう別れは特別なことではなかった。早稲田大学教員の定年はその頃も 70 歳だったが、これは後継教員が得にくいことが一因であった。国立大学では 60 歳、世間一般では 50 歳定年が普通という時代で、還暦を大事な通過儀礼の年として、誰もが祝ったものである。

紙屋氏は還暦の年には、教育・研究・校務、などの諸活動に明け暮れ、隣の研究室の私から見ると、寸暇もないような様子であった。2014 年に多忙な校務からようやく解放されると、すぐさま中途半端に残していると気にしていた研究テーマに取り組んだ。そして早くも退職直前に『梅北一揆の研究』を上梓している。「梅北一揆」は、豊臣秀吉の朝鮮侵略に際して、島津氏の家臣梅北国兼が起したもので、これを統一政権の成立に抵抗する在地領主層の反乱と位置付ける紙屋氏は、同書をあえて郷里鹿児島県の南方新社から刊行した。東京の専門出版社から数々の論著を公刊してきた紙屋氏がそうしたのは、島津氏の支配・交流圏の歴史への深い想いがあったからであろう。ついでに言うと、紙屋氏が学界に知られた最初は、1975 年に専門誌として評価の高い『日本史研究』に掲載された論文「梅北一揆の歴史的意義―朝鮮出兵時における一反乱―」（157 号）によってである。

『梅北一揆の研究』の「あとがき」に紙屋氏は今後のテーマを挙げ、「いつか挑戦したい」と書いている。だとすれば紙屋氏は、定年後の人生の展開を期していたのであろう。そういう計画を持つことを当然と考えるのが、高齢化社会の昨今である。

私は北島ゼミの先輩として大学院生時代を共有し、その後も長い年月、同僚の関係にあった。今 82 歳の長寿に恵まれている私としては、紙屋氏の逝去をいっそう残念に思う。

ところで、紙屋氏が博士学位請求論文として提出したのは、「幕藩制国家の琉球支配」というタイトルの論文であった（『幕藩制国家の琉球支配』として 1990 年、校倉書房から刊行）。同書の「あとがき」に、紙屋氏は「梅北一揆の研究に進んだ私は、三〇代を琉球支配の研究にこだわり続けた。その理由は、一九七二年五月一五日に沖縄が日本に返還されたが、当時、私はその歴史的経緯について無知だったことである」と書いている。

紙屋氏が早稲田大学教育学部から大学院文学研究科の北島ゼミに入ったのは、「大学紛争」時代の 1969 年である。紙屋氏はすでに梅北一揆というテーマは持っていたが、大学院で「問題設定」自体を磨きあう過程で「琉球」という対象をつかんだ。そして島津氏と琉球の関係から明清中国へ視野を広げ、「東アジア」の枠組みで歴史的変遷の論理を組み立てる歴史家に成長していったのである。

紙屋氏は、「琉球」が研究の視野に入った事情について、「歴史研究の動機が希薄だった私は、ここに追体験を求めた」と率直に述べている。1972 年の「沖縄返還」という「現実」は、紙屋氏の修士論文のテーマ選択に大きな影響を与えたのである。「追体験」とは、歴史学の手法で事態を深く認識することである。紙屋氏は「無知」の反省に基づいて、「沖縄返還」を日琉関係史研究の形で追求することを決意したのである。

当時の大学院生や歴史学会は、「研究の動機」や「問題意識」について意気込んだ議論を交わす空気が強かった。北島ゼミもそういう空気が濃厚であった。温和で常識を尊重する人柄の紙屋氏も、時代の空気は十分に吸っていて、眼前に生起した「沖縄返還」という「現実」を、学問追求の情熱に変え、島津氏の琉球支配と東アジアの中の日琉関係を研究する方向へと邁進していったのである。

紙屋氏は、研究を進めて、琉球が日本・中国への「両属」の関係にあるという見解に辿りつき、このことを基本の近世琉球観とした。ただし紙屋氏の「両属」論は、琉球の従属性を言うためではなく、琉球が歴史の「主

体」であろうとして、不断に「自立」のための営為を重ねてきたことを表す用語であった。

紙屋氏の「琉球」研究は、若い歴史学徒として全力で「現実」に向き合ったということだが、紙屋氏の人間的特徴は、学問的課題だけを「現実」として受け止めたのではないところにあった。

紙屋氏は、求められる事にはほとんど応じた。それらについて、私は高田馬場駅から池袋駅までの山手線の中で、折に触れて聞いて、今も耳に残っている。この山手線での雑談は、たまたま自宅への経路がこの区間だけ同じだったからである。私は大学運営に携わらなかったが、学科や「教室」「ゼミ」レベルでも大小の行事がある。紙屋氏と私は、教室会議やゼミのコンパなどが終わって帰宅する際に、地下鉄やバスで高田馬場駅へ向かうあいだ、そして山手線で池袋まで乗るあいだ、二人だけになることがあったのである。

紙屋氏は、要請される「現実」を自分に責任があることと受け取り、それから「逃げない」「避けない」という生き方を自分に課していたように思われる。そのように理解すれば、研究者としても第一線にあり続け、長期間にわたって校務を支え、家族の事も可能な限り対応するというありかたが納得できる。

早稲田大学の教員になってからの紙屋氏は、教員組合の執行委員も引き受け、その後は大学運営の役職を次々と担当した。1994 年に第一文学部学生担当教務主任に就任し、以後、全学の学生部長、理事、系属校の早稲田中高等学校長、早稲田大学図書館長など、周囲が驚嘆するほどの校務を勤めている。日琉関係史に限られない大小の科研費関係の共同研究を支える立場にもなっている。どれも緊張をもって対処すべき紙屋氏の眼前の「現実」であり、引き受けるべき事だったのである。

だがそれらはまだ、家の敷居を出てからの事である。紙屋氏は家族生活でも、近隣関係でも同じスタンスで臨んでいたように思われる。紙屋氏は御連れ合いの体調がよくないことが長く続いていた。紙屋氏は、家族・近隣の事もまた引き受けるべき「現実」として、可能な限り取り組んでいた。近隣というのは町内会のことなどである。

紙屋氏の生き方で驚嘆するのは、「現実」への対処の仕方だけではない。時間を切り刻むような毎日の苦心を、紙屋氏自身はどのように思っていたのか。それは、私が想像することの反対で、それら一切を「楽しんだ」と言っているのである。これは紙屋氏が書き残した言葉で、それも研究活動だけではない。

紙屋氏は、『幕藩制国家の琉球支配』（1990 年）の「あとがき」に、研究のまとまりへのいきさつと共に、「琉球を通して日本が見えてくる。研究は楽しかった。学問のおもしろさを発見した」と書いている。この時、紙屋氏は福岡大学の助教授だったが、この著書は、大学院生時代以来の紙屋氏の研究成果の結晶であり、学位請求論文の内容である。定職のポストを得るまでの労苦のすべてを積み重ねて出来あがったものである。

1992 年からは、早稲田大学の教員としての生活が始まり、紙屋氏の視野は徐々に広がり、1996 年には『大君外交と東アジア』（吉川弘文館）という著書が出され、2013 年には再び校倉書房から、『東アジアのなかの琉球と薩摩藩』という大著を出している。

それでも研究ということなら、苦労を物ともしない者が各地にいる。休日だけを調査や執筆にあてることができる在野的な研究者は、気苦労なやりくりをして成果を出そうとしている。その意味では紙屋氏が定職のない状態で努力を重ねたことも、特段のことではない。

しかし、私が驚いたのは、2002 年、学生部長任期終了を画期として、紙屋氏が『薩摩と琉球』という小冊子を私家版の形で作った際の、「おわりに」に書いた一文である。そこには、「私はこの八年間一貫して学生部関係の仕事をしてきたが、それは「楽しかった」の一語に尽きる」と書いている。この小冊子には校務の履歴とともに、この期間の紙屋氏の論文や講演が収録されている。研究・校務の並行の 8 年間を振り返って、紙屋氏は「楽しかった」という一語に総括したのである。

これを知ってみると、大変だった、苦しかったという受け止め方は、私の勝手な感想で、御本人はむしろ強靭に楽しんでいたことになる。あまりに早かったと惜しんでやまない私たちとは一線を画し、紙屋氏は、自分は 70 年余の一生を十分に生き切った、多くの事を経験したが、それらはすべてが楽しかったの一語に尽きる、と総括しながら去ったようにも思われるのである。あらためてご冥福を祈りたい。